

平成29年5月13日

八ヶ岳南麓里山再生・農業支援友の会
会員の皆様へ

《5月度農場便り》

「またもや稲苗育苗失敗」

いつも有難うございます。温床で育苗していた夏野菜のキャベツ類の定植、トマト、茄子、ピーマン等の夏野菜の鉢上げもほぼ終え稲作の田植の時期を迎え田んぼに水が張られ始めました。先月の農場便りで稲作に関して新しく催芽器を導入して健康な苗づくりをと記述しましたが残念なことに催芽して播種するまでは良かったのですがハウス内での育苗の温度管理を怠り高温障害に遭わせてしまい全滅の状況になってしまいました。一時は途方に暮れて諦めかけていたところ東北の自然栽培仲間と相談した結果、岩手の阿部さんが偶然にも小生が必要としている数量の「亀の尾」の苗が余分にあるということで快く分けて頂けることになりこの18日にとりに行く予定です。思わぬ天からの贈り物で一安心しているところです。自然栽培の稲作を山梨で実践している農家は2、3軒それも規模は小さくとても譲って頂ける状況ではないのです。原因の高温障害がなぜ発生したのか、例年通りの方法で行っていたのですが例年と異なる点は播種が1週間遅れていたことです。芽出しした種籾を播種するのですが更に発根、発芽が勢い良くなる段階でハウス内の育苗トンネル内の温度が40℃を超えていたのでしょう。4月下旬になるとハウス内は10時には40℃を超えてしまいます。ハウスの両サイドを開閉して温度調整するのが日課になります。ハウス内の検温は欠かさずしていたのですが温度計は設置したのに稲苗の育苗トンネル内の温度管理していなかったのが致命的でした。春から夏への一週間の気温の変化は予想を超えています。1年という短い一生の中で更に播種から田植えまでの本葉が5~6枚になる30日間、特に本葉が出始める1週間は一番気を使う時期と改めて痛感した次第です。失敗は学ぶ場ですね。自前の育苗土は使い切っていたため残っていた種籾を市販の育苗土と田んぼの土と燻炭を混ぜ育苗として比較栽培してみました。市販の育苗土の成長した苗は葉の色が深緑で自家製の醗酵育苗土の稲苗は薄緑で歴然と違いが判別できます。田んぼの土と籾殻燻炭育苗土でも十分育っています。こうしたことが判明したことも怪我の功名で良い経験になりました。この歳になっても失敗は生かすしかないですね。

・4月23日播種 亀の尾 (5月13日)

・4月28日播種 亀の尾 (5月13日)



メール yamaki.yoshio@peach.plala.or.jp

携帯080-3080-3017